

「抽象的・人間的労働」について

金 鐘 碩

商品は價值と使用價值との統一物であるが、それをつくり出した労働もまた「抽象的・人間的労働」および「有
用的・具體的労働」として「二者闘争的」*“Zweisachliche”* に表示されよう。

諸生産物交換の端初的形態は、「直接的な生産物交換の形態」であつて、 $X_{\text{諸生産物}}A = Y_{\text{諸生産物}}B$ において示される。これらのAとBは交換されることによつて、はじめて、諸商品となるのであつて、それ以前ではたんなる諸使用對象であるにすぎない。

このような諸生産物交換の端初的な形態は、そのかぎりでは、往々にして偶然的かつ不完全ではあるが、しかしそのうちにはすでに諸商品交換の一般的規定性が含まれているのである。だから諸生産物の多少とも規則的で反復的な交換諸關係は、 $X_{\text{諸生産物}}A = X_{\text{諸生産物}}B$ によつて示すことができるのであつて、かくして諸生産物は相互に一定の價值諸關係をとり結ぶことになるのである。

諸生産物が價值物であるのは、それらに、共通な社會的實體が結晶化されている、すなわち、それらに「抽象的・

人間的労働」が對象化されているからだとされるのであるが、それでは、この「抽象的・人間的労働」とはいつたいどんな性格をもつた労働なのであろうか。マルクスは「いかなる物も使用對象であることなしには價值ではありえない」といつている。これは諸商品の價值が使用價值＝商品體、商品體そのものが一つの使用價值」なのであつて、それ故に諸價值の擔い手であるをばなれては存在するものではないということなのであるが、しかし「使用價值は、商品生産においては、それ自身のために愛される物では決してない。諸使用價值は、この場合には總じて、それらが交換價值の物質的基礎すなわち擔い手であるが故にのみ、またその限りでのみ生産されるのである。」(三四二頁)

(1) 「資本論」青木書店上製版第一卷二三三頁。以下頁數だけあげるがすべてこれに依る。

だからこういうことになるであらう。諸商品價值をつくりだすには、まず價值をもつた使用價值をつくらなければならぬ、すなわち、「有用的・具體的労働」をしなければならぬということである。この「有用的・具體的労働」というのは、労働の目的・對象によつて規定されているばかりでなく、諸個人の労働の仕方様式によつてもまた規定されているのである。だから具體的で、個別的であるのだが、それが生産過程において支出されることによつて諸商品に直接に物體化され、客體化されて諸商品體を形成する。これは現實に、その生産過程において、誰れ彼れの目にもはつきりとみとめるのであつて、いわば労働の「自然過程」である。

しかしながらこれとは反對に、「諸商品の價值對象性はつかまへどころのない」もの、または「純粹に社會的なもの」なのであるから、それをつくり出した労働もまた、諸商品の生産過程において見ることは決して出来ない。「だから、個々の一商品をどんなにひねくりまわして見ても、それは依然として、價值物としては把えられえないものである。ところが、諸商品はそれらが人間的労働という同じ社會的單位の諸表現であるかぎりでのみ價值對象

性を有するということ、したがつて、それらの價值對象性は純粹に社會的なものであるということを感じ起すならば、それはただ商品と商品との社會的關係においてのみ現象しようということは、全くおのずから明らかである。」(一三三頁)

諸商品の價值實體である勞働の斯様な性格からして、ひとはややもするとそれらの理解の觀念論的な傾向におち入り易いし、また逆にそれを目に見るものとして把えようとするところから、それを「具體的の性格」をもつた勞働として理解しようとする傾向があるが、われわれはこれらの諸傾向を嚴に排除しなければならない。

さてむづかしい説明を一應ぬきになると、この「商品と商品との社會的關係」 = *gesellschaftliche verhältnis von waren*、とは諸商品の交換諸關係に他ならないのであるが、この交換諸關係は諸商品を價值物として、「抽象的・人間的勞働」の對象化されたものとして表示するところの唯一の場である。この意味で價值——したがつて「抽象的・人間的勞働」は、それ自體すでに交換諸關係を前提しているのであつて、これなしには、勞働の「二重性格」ということははじめから問題にさへなりえないのである。

(2) このあとの傾向は最も廣範に存在するものであつて、諸商品の價值實體である勞働を「移動自由な勞働」や「賃勞働」に依りて見ようとするのである。だがマルタスは「賃勞働としての勞働の形態は全過程の姿態にとり、また生産そのものの獨自的樣式にとつて決定的だといへ、賃勞働は價值を規定するものではない」(B II 二四一頁)といつてゐる。「賃勞働」とか「封建勞働」とか「奴隸勞働」とかは、それぞれ相異なつた社會的經濟諸關係によつて規定された、すなわち搾取諸形態によつて規定された勞働の諸形態を表わしたものにほかならぬのであつて、「賃勞働」を諸商品價値の實體である勞働と同一視すべきでない。

價值が諸商品の交換諸關係を通して現象するのであるならば、その實體である「抽象的・人間的勞働」が諸商

品の生産過程において現實にそれらのなかに對象化されていなければならない。生産過程において實際に生産されなかつたものが交換諸關係においては現象するということは決してない。だがしかしマルクスも「資本論」の初版でのべているように二つの種類の労働——「有用的・具體的労働」と「抽象的・人間的労働」——が諸商品に對象化されるのではないことは明らかである。生産過程において現實におこなわれるのはただ「有用的・具體的労働」のみである。

だが諸商品價値の實體である「抽象的・人間的労働」は、こり固まつた状態においてのみ、對象的形態においてのみ、價値となるのである。「流動状態にある人間的労働力、すなわち人間的労働は、價値を形成するが、しかし價値ではない。それは凝固した状態において、對象的形態において、價値となる。」(一三九頁)「ある使用價値または財がある價値をもつのは、そのうちに抽象的・人間的労働が對象化または物質化されているからに他ならない。」(一一九頁)だからわれわれは諸商品價値の實體である労働を、生産過程においてすでに諸商品に對象化または物質化された種々の諸労働の有用的な具體的性格を捨象することによつて、その對象的形態において規定することが出来るのである。このように労働の具體的性格を捨象するということは、具體的な個別的諸労働を「抽象的・一般的労働」・*abstrakt allgemeine Arbeit* に還元することに他ならないのであるが、かかる還元は生産者達の意志とは獨立の社會的諸關係——交換諸關係がたえず行つているのである。

このようにして規定された労働は「抽象的労働」といわれるのであつて、この労働には労働の具體的な個別的性格はまつたく微塵もふくまないのである。かくしてこの労働は諸商品價値の實體となるのであるが、これを、われわれは價値の消極的規定とよぶのである。

あとも見るように、商品生産者社會では、生産者達の個別的な私的諸勞働は、その社會的性格をそのままの姿では表わしえないのであつて、それらを「抽象的・人間的勞働」に還元することによつて、「社會的勞働」たる性格を表わすのである。だから諸勞働の具體的・個別的な性格を捨象することは、それらが「社會的勞働」に生成することの特殊の様式にはかならないのである。

それでは諸商品價値の實體である勞働を別の面から見ることにしよう。それは「人間的勞働力の支出」すなわち「人間的勞働」である。マルクスによれば、これは「生理學的意味における人間的勞働力の支出」であつて、それ故に人間の腦髓・筋肉・神經・手等々の生産的支出のことである。「生産的活動の規定性、したがつてまた勞働の有用的性格を度外視すれば、それに残るところは、それは人間的勞働力の支出ということである。裁縫業と織物業とは、質的に相異なる生産的活動だといへ、いずれも人間の腦髓・筋肉・神經・手などの生産的支出であり、かかる意味で、いずれも人間的勞働である。」(一二七頁)

この「生理學的意味」にいう「人間的勞働力の支出」は、さきの「抽象的勞働」と同じく單に商品生産の勞働にのみ存するものである。だからマルクスはこの「勞働」を「人間的勞働、それ自體を、人間的勞働〔力〕一般の支出」(一二七頁)または「人間的勞働だといふその、抽象的屬性」(「一般的屬性」)(一五〇頁)といつてゐるのである。さらに、この「生理學的意味」での「人間的勞働力の支出」したがつてまた「人間的勞働」を、マルクスは「自然力」たる「人間的勞働力の支出」と對立させてゐる。「…自然質料を彼自身の生活のために使用されうる形態で取

得するためには彼の身體に屬する自然力たる腕や、頭や、手を運動させる」(三三〇頁)とか「特殊な、目的を規定された、形態での人間的労働力の支出」(三二頁)とかいう場合に問題となる労働は使用価値をつくるのであつて、だからそれはどの社會的經濟形態からも獨立した、永久的な労働の「自然過程」である。

かように人間の身體に屬するところの脳髓・筋肉・神經・手等々の支出の場合でも、それを一般的、社會的側面からは諸商品の價值を形成するものとして規定することが出来るし、また他方において、その具體的、個別的側面からは諸使用価値をつくり出すものとして規定することが出来るのである。われわれは「人間的労働力の支出」をこのように二重的に規定することによつて、マルクスのつぎのことをよりよく理解しうるのであらう。——「諸價値の實體をなす労働は、同等な人間的労働であり、同じ人間的労働力の支出である。商品世界の諸價値で表示される社會の總労働力は、無數の個人的労働力から成立つてゐるとはいへ、このばあいには一個同一の人間的労働力として意義をもつ。これらの個人的な諸労働力は、いずれも、それが社會的な平均労働力たる性格をおび、かかる社會的な平均労働力として作用し、したがつてまた一商品の生産において平均的に必要な、または社會的に必要な労働時間を要するにすぎぬ限りは、他と同じ人間的労働力である。」(二二〇頁)

かくして「人間的労働」は諸商品價値の實體となるのであるが、われわれはこれを價値の積極的規定とよぶのである。

以上考察してきたところの「抽象的・人間的労働」は、價値實體の質的規定性だといわれているのであるが、しかし、それにも拘らずこの労働が量的内容をもつたところの質的規定性であることを以下において見るであらう。

さてマルクスは彼の草稿「直接的生産過程の諸結果」(M¹ 濃集第九卷三八一—三八二頁)のなかでつぎのようにのべ

ている。——「商品を『勞働』に還元するだけではじゅうぶんでない。それを二重の形態における勞働に還元することが必要である。すなわちこの形態では、勞働は、一方では具體的勞働として商品の使用價值に表現され、他方では社會的に必要な勞働として交換價值によつて計算される。……勞働が價值を形成する要素として計算され、商品がその對象化として計算されるかぎりでは、勞働の特殊な有用性やその特定の性質や様式はまったく捨象される。このようなものとしては無差別な、社會的に必要な一般の勞働であつて、あらゆる特殊な内容にはまったく無關心である。」これまで、われわれは諸商品價值の實體である「抽象的・人間的勞働」が、一般的社會的であるとのべてきたのであるが、それは「社會的に必要な一般の勞働」なのである。それ故に諸商品に含まれた諸勞働が「社會的に必要な」ものである限りでのみ「抽象的・人間的勞働」という性格をうけとるということが出来るのである。

いわゆる「社會的價值」と「個別的價值」の解明がこのことの理解をたすけてくれるであろう。周知のように、同種類の商品を、「社會的な平均的諸條件」のところて生産する場合には、その「社會的價值」から「個別的價值」は乖離しないであろうが、それ以上のところとそれ以下のところとは、それが乖離するであろう。つまり前の場合ではその「個別的價值」はより小さいであろうし、これに反して後の場合ではそれがより大きいであろう。けれども「一商品の現實的價值はその個別的價值ではなく、その社會的價值」(五三六頁)なのであつて、例外により進んだ生産條件のもとでの勞働は自乗化された勞働とみなされるから、前の場合では、價值實體である勞働のより多くの量をその諸商品に對象化することになり、したがつてそれらはより多くの「社會的價值」に表示されるし、他方、後の場合では、反對に、その勞働の少量をその諸商品に對象化することになり、したがつてそれらはより少量の「社會的價值」に表示されるのである。このようにまず共通の場において成立せる勞働こそが「社會的勞働」と

いう資格で他の種々の諸商品と等置されるのであり、また互いに交換されるのである。

三

ついでに、ここで、マルクスがロビンソンの勞働と「人間的勞働」についてのべているところを少し説明しておこう。マルクスは云う。「經濟學はロビンソン物語を好むから、まずロビンソンの島の生活を見よう。生來つつましやかではあるが、それでも彼は相異なる種類の慾望を充たさねばならぬのであり、したがつて道具をつくり、家具をこしらえ、駱馬をならし、魚貝をとり、狩獵をするというような相異なる種類の有形的諸勞働を爲さねばならぬ。……彼の生産的諸機能は相異なつてはいるが、彼は、それらの機能が同じロビンソンの相異なる活動諸形態に他ならず、かくして人間的勞働の相異なる諸様式に他ならぬことを知つてゐる。彼は必要そのものに迫られて、自分の時間を自分の相異なる諸機能のあいだに正確に配分する。彼の總活動においてどの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がより僅かの範圍を占めるかは、所期の有形的効果を達成するために克服さるべき困難の大小によつて定まる。經驗が彼にそれを教える。そしてわがロビンソンは、時計と臺帳とインキとペンとを難破船から救ひ出してゐるので、りつばなイギリス人らしく、やがて、自分自身のことについて帳簿をつけ始める。彼の財産目録には、彼が所有する諸使用對象や、それらの生産に必要な相異なる仕事や、最後には、これらの相異なる諸生産物の一定諸分量のために彼が平均的に要費する勞働時間やの、明細書きがある。ロビンソンと彼の手製の富たる諸物との間の一切の連關は、このばあい極めて簡單明瞭であつて、M・ヴェルト氏でさえ別に頭を痛めないで理解しえたほどである。それにも拘らず、この諸連關のうちには、價値のいつさいの本質的な諸規定が含まれてゐるのであ

る。」(一七八—一七九頁)

ここに「人間の労働」とマルクスがいつているのは、われわれがさきに考察してきた「裁縫業と織物業とは、質的に相異なる生産的活動だといえ……いずれも人間の労働である」の「人間の労働」と同じ内容のことであつて、このことは右の最後の「この諸連鎖のうちには、価値のいつさいの本質的な諸規定が含まれている」といつていることばによつてより一層明らかとなるのであるが、かかる内容の「人間の労働」はすでにわれわれによつて考察されている。といつてもこれで問題がすべて片ついたのであつて、それではわがロビンソンの種々の諸労働の社会的性格がこの「人間の労働」——「抽象的労働」として、諸商品価値という對象の形態において表示されるのであろうかという問題がそこに尙残るであろう。しかしここでは、ロビンソンの諸労働の社会的性格がこのような物象的形態において、いわば廻り道をして、現われるようなことは決してないことはまつたく明らかである。

この場合、ロビンソンの諸労働ははじめから簡單明瞭であつて、ここでは小さな規模においてはあがあるが、彼の諸慾望によつてははじめから規定された自己の諸労働の計畫的な諸配分があり、したがつてここではこれらの諸労働が彼の慾望の總體にとつては絶対に必要かつかくべからざるものとなつていふ事情が存在しているのである。だからここでは、彼の諸労働の特殊な有目的性格がそのまま直接にその社会的形態となつていたのであつて、このことはまた「共同の生産手段をもつて労働」する「自由人」たちの社會にとつても擴大された規模であてはまるのである。

さて然るに、マルクスがここで「人間の労働」とか「価値の……本質的な諸規定」とかいつているのは、もしロビ

ンソンの「相異なる種類の有用的諸労働」の諸生産物が交換諸関係において現われるとすれば、それらの諸労働は「抽象的・人間的労働」としての性格をとらねばならず、したがつてまた、それらの諸生産物は價值性格をうけとらねばならぬであろうという一關係がすでにそれらのうちに含まれているということをのべようとしたのである。それと同時にまた諸商品價値の實體である「人間的労働」を、ロビンソンの島での労働を引合ひに出すことによつてまつたくちがつた角度からも説明しようとしたのである。

われわれはここで「抽象的・人間的労働」というこの範疇が諸商品の生産諸関係においてのみ存するものであるということ想起するならば、諸商品の存しないところではそれが有りえないということはまつたくおのずから明らかであろう。

これに反して、私的所有諸關係と社會的分業（商品生産）を基礎とし、相互に無連絡に獨立して、ただ彼らの個別的判斷のもとでのみおこなうところの私的生産者達の個別的な私的諸労働は、その社會的性格を、それらの反對物たる「抽象的・人間的労働」として諸商品の價值對象性において、しかも、それらの交換諸關係を通してしか表示しえないのである。ここでは私的生産者達の諸労働の質的編制とともにその量的編制もまたまつたく偶然的であつて、それ故に社會的労働の配分の仕方はまつたく無政府的である。それは諸商品の價值關係を通してのみ規制されるのである。このことをマルクスはクーゲルマン宛の手紙のなかでつぎのようにのべている。——「そして社會的労働の連關が個々の労働生産物の私的交換として現われる社會状態では、労働のこの比例的配分が自己を貫徹するところの形態がまさにこれらの生産物の交換價值である」(M. E. Ausgewählte Briefe s. 242) 云。

だから商品生産者の社會形態における私的諸労働の「獨立的な・社會的性格」は、これらの私的諸労働の「人間

的労働」としての同等性であり、したがつてまた、それらの労働の諸生産物が價值對象性をうけとるということにはかならないのである。

四

かように、「抽象的・人間的労働」は「社會的労働」の商品生産者社會の獨自的な表現形態にはかならなかつた。だから諸商品の價值とは「對象化された社會的労働」であるといつてもいいわけである。すでにわれわれは、「抽象的・人間的労働」が「社會的に必要な一般的労働」であつたのを見てきたのであるが、この場合の「社會的に必要」ということの意味も右の事情を考へ合わせることによつてより一層明確になるであらう。

諸商品の價值實體が「抽象的・人間的労働」だとしても、それは量的内容をもつたところの對象化された労働にほかならぬのであつて、そもそも、この「労働」は對象化された労働のことかあるいはまた同じことであるが、人間的労働力一般の支出としての労働の對象的形態のことをいうのである。これこそ價值の最も本質的な規定である。だから諸商品の價值を形成する労働は「抽象的・人間的労働」であるというこの命題は、いやしくも諸商品の生産と交換の存するところでは等しく一般的に妥當するのであるし、さらに、社會の富が「老大な商品集聚」として存在し、個々の諸商品はその原基形態となつていろいろなところでは、この命題はその廣さや深さからいつても、最も普遍的に妥當するのはいうまでもないであらう。